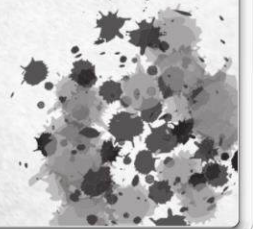




田中角栄

～戦後日本最強のリーダー～



時代背景

幼少期に戦争の時代を生き抜き、戦後日本が大きく動き出す1950年頃、今回の偉人「田中角栄」は政治の世界に飛び込んだ。1947年に初当選したのち、彼は持ち前の「頭脳」と「行動力」、時には「資金」をフル活用し、自党内での地位を高めていった。最終的に総理にまで上り詰め、たった2年間の政権であったが、その強烈なリーダーシップで多くの実績を残した総理である。そんな彼から、今回はリーダーに必要な素質を学んでいく。

偉人の生涯



田中 角栄 1918～1993 日本 政治家・実業家(建築士)

- 主 著 『』 当時の日本で大流行した
 異 名 「コンピューター付きブルドーザー」…頭脳+豪快な行動力
 「今太閤」…現代版の太閤(太閤とは誰のこと…?→)
 「目白の闇将軍」…国会に登院できない時期も、目白にあった自宅から、政治に影響を及ぼした

西 暦	年 齢	生 涯
1918	0	新潟の農家の家に生まれる。7人兄弟の次男で長男は若くして死去。極貧生活であった。
1932	14	高等小学校(現代でいう中学校)卒業→就職するも合わず、1か月で退職
1939	21	<input type="text"/> 事務所を設立 自らが上に立ち、商売することを目標に努力してきた
1940	22	日中戦争発生 戦争に参加するも肺炎を患い帰国
1943	25	田中 <input type="text"/> 事務所設立 売り上げを急増させる
1947	29	戦後、政治家の道を志し、この年に初当選
1954	36	自民党副幹事長まで成り上がる 当時首相であった吉田茂の側近へ 以降、岸内閣・池田内閣・佐藤内閣で大臣を歴任(岸内閣時には戦後初の30代大臣に)
1972	54	内閣総理大臣に就任 当時史上最年少の首相となり、支持率は <input type="text"/> %を誇った <input type="text"/> 国交正常化を実現
1974	56	オイルショックによる不況、角栄批判の記事などの影響で、退陣に追い込まれる
1976	58	<input type="text"/> 事件発生 元首相としては異例の逮捕 以後、死ぬまで裁判が続く
1993	75	死去 1990年まで政治家として活躍

★角栄の豪快エピソード① 「生きたカネは、やがて“芽”を出す。敵ですら、味方になる。」

彼の成り上がり人生を語る上で欠かせないのが、「お金」の使い方。貧しい幼少期を経験し、金によって人が離れていった父親の姿や、社長になった途端手のひらを返すように態度が変わった同業者などをみて、金が人を動かすという考えが身に染みついていた。政治家になってからも徹底して金を活用し、人の心を掴んでいった。

田中派の一回生議員が女性問題で困り、解決のためにどうしても100万円（現在の価値では3倍以上）足りなかった。やむなく角栄に100万円の借金を申し込んだところ、すぐに袋が手渡され、中身には300万円と直筆の一枚のメモが入っていたという。

トラブルは以下のように必ず解決しなさい。まず100万円で問題にケリをつけろ。次の100万円でお前の不始末で苦勞したまわりの人たちに、飯を奢るなど、必ずお礼をすること。次の100万円は万一の場合のために持っておくように。以上、これらの金の返済は無用である。

また、敵となる反田中派の議員が入院した際にも、角栄は真っ先にお見舞いに訪れ、派閥のボスよりも多額の見舞金を置いていったという。毎日数百万の見舞金を置いたという話も残っている。この議員は以後も他の派閥に所属していたものの、ピンチの時は派閥を超えて田中を支えたという。

このように、角栄は資金を効果的に使い、時には敵さえも味方につけた。金を出すだけでなく、どのように渡せば相手の心に響くだろうか、相手のプライドを傷つけずに済むだろうかなどという気配りにも長けていたからこそ、多くの仲間が彼のもとに集まったのだろう。節約、貯金が当たり前の現代であるが、「お金は使うべき時には使う！」という心意気が必要かもしれない。

★角栄の豪快エピソード② “中卒”の“田舎者”が大臣として成功した理由

大臣とは、各省庁のリーダー。つまり、今でいう東大や京大といった名門校を卒業したエリートたち(官僚)が部下となる。官僚は元々政治家との関係も良好ではなく、中卒で田舎者の角栄に対して敵対心をもってかかる者も多かったという。そんな相手に対して、一発で心を掴んだ大臣就任時の演説が、伝説となっている。

「私が田中角栄であります。皆さんもご存じの通り、高等小学校卒業であります。皆さんは全国から集まった天下の秀才で、金融、財政の専門家ばかりだ。かく申す小生は素人ではありますが、トゲの多い門松をたくさんくぐってきており、いささか仕事のコツは知っているつもりであります。これから一緒に国家のために仕事をしていくこととなりますが、お互いが信頼し合うことが大切だと思います。従って、今日ただ今から、大臣室の扉はいつでも開けておく。我と思わん者は、今年入省した若手諸君も遠慮なく大臣室に来てください。そして、何でも言ってほしい。上司の許可を取る必要はありません。できることはやる。できないことはやらない。しかし、すべての責任はこの田中角栄が背負う。以上！」

これを聞いた大蔵官僚たちは、一発で参ってしまった。君たちは自由にやれ、責任は私取る、と言われて心醉しない部下はいないだろう。現在の政治家というと、「記憶にございませぬ」「私は関係しておりませぬ」

「検討したいと思います」などと、保身に走り無難な発言をするイメージがついてしまっている。現在の政治家に、彼のように豪快に言い切れる人はどれだけいるのだろうか…？と、つい考えてしまう。



偉人の功績・思想

★日中国交正常化

当時日本にとっての中国とは「中華民国」（今でいう台湾）であった。「中華人民共和国」は米国と敵対する国であり、米国の顔色をうかがう日本も同様に、国として認めていなかった。そんな中首相に就任した角栄は、東アジア外交を主導していきたくらいで中国との国交正常化を進めた。米国より一足先に動くことは当時異例であったが、ニクソン大統領への根回しも丁寧な済ませ、9月に国交正常化（^[6]）を成立させた。これが就任から2か月の出来事である。

この時に、国交正常化の証として、上野動物園に2頭のジャイアントパンダが贈られている。

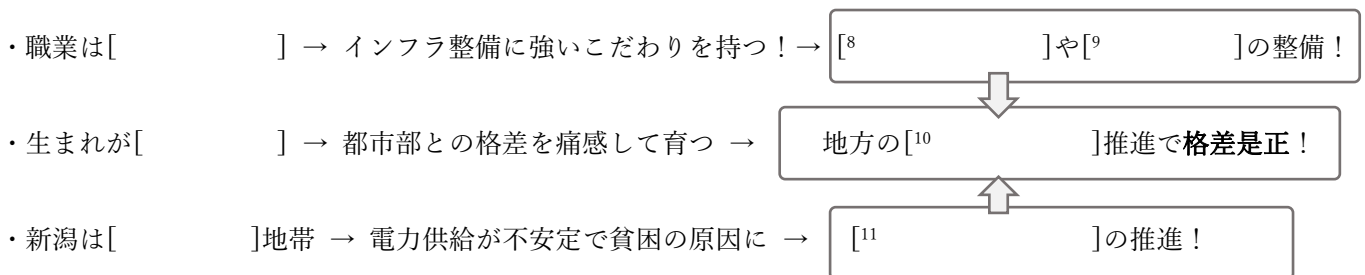


★目白の闇将軍

退陣に追い込まれた角栄をさらに窮地へ追い込んだのが^[7]である。米国の航空会社が航空機をANAへ購入するよう説得するために、角栄が賄賂を受け取っていたとして逮捕されたのである。これは証拠が曖昧であったり、関係者が相次いで不可解な死を遂げたりするなど、疑惑が多く、角栄自身も容疑を否認していた。しかし、裁判にかけられた期間が長かったため議員活動ができなくなってしまったのである。そこで、目白にあった自宅から出られない角栄は、弟子たちを権力者に送り込むことにした。大平・鈴木・中曽根と3代に渡り田中派の議員を首相へ押し上げたように、陰で政界に影響を与え続けたため、**目白の闇将軍**と呼ばれるようになった。ちなみに、ロッキード事件の裁判は最高裁まで続いたが、角栄の死によって未解決のまま終了となった。戦後最大のミステリーと言われている。

★角栄が作った日本の基礎

たった2年という首相在職期間でここまでの印象を与えているのは、遺した実績が大きいからである。もう一度彼の生涯を見ていくと、彼の人生が政治家として成し遂げた実績に繋がっていることがわかる。



その他にも、郵政大臣の在職中にテレビ局の承認を一気に推進し、**日本のテレビ業界の基礎**を作ったことや、**情報回線の全国的な整備**の必要性を説き、後のインターネット社会の基礎を作ったことなど、現代日本を支えるものをいち早く察知し、行動に移していたことがわかる。カネの問題や逮捕の面でマイナスの印象を与えるものはあるが、ここまで行動力に長けた首相は珍しく、強い人気を誇った。逮捕後、裁判で政治活動が制限されていても、67歳で脳梗塞になり国会へ行けなくなっても、議員として当選し続けたことが、圧倒的な支持を物語っている。



偉人から学ぶこと

Work リーダーに必要な資質とは何だろうか？

最後に戦後最強のリーダーから、人の上に立つための資質について学んでいく。まずは自分の中でリーダーに必要な資質を考えてみましょう。

自分の考え

他者の考え

角栄流 リーダーに必要な力

①

大臣として入省してきた新人を迎え入れる際のエピソード。多くの人前でメモを一切見ずに数十人の名前を呼びながら握手をして声を掛けた。

名前を間違えることが決して許されない状況で、それを淡々とやってのけた後、秀才ぞろいの若者に対し一言。「確かにお前たちは頭はいいだろうが、人間としての力は私の方が一枚も二枚も上手である！

上司と上手いかないこともあるだろう。そんな時は迷わず大臣室に駆け込んで来い！」

②

中卒の政治家がエリート揃いの官僚に受け入れられたのはこれまでの

説明の通り。そして口だけでなく仕事もできたからこそ、彼は信頼された

のである。難しい決断にも的確に指示を出し、ここぞという時は潔く頭を下げた。無難な逃げ方は一切しなかった。

③

政治家として宴会が多かったが、彼は毎晩3つまでで、各1時間ずつと

決めていた。ゆえに、18時から始まる宴会も21時には必ず切り上げ、

22時には就寝するようにしていた。その後、深夜の2時に起きて徹底的に勉強に励むのが日課であった。

(+α)新潟から上京した際にも、朝5時から夕方5時まで力仕事をした後、学校で授業を受けた。寝落ちして体がふらつけば、手のひらに鉛筆の芯が刺さって目覚めるように工夫していたそうだが、ある日あまりに疲れて大きく傾いてしまった際に親指の深くまで鉛筆の芯が刺さってしまったという。

この芯は角栄が死ぬまで指に残り続けていたそうだ。

④

母は謙虚な人で、常に「いい気になるな、でかいこと言うな」と言い続けた。

角栄自身も人に対して謙虚であり、気配りを徹底した人物であった。

ある日、予定を管理する秘書が、角栄の関係者の葬儀よりも、重要な会議を優先させたことがあった。

これに対して角栄は、「これが結婚式なら判断は正しい。改めて祝いに行けばよい。だが葬式は別だ。

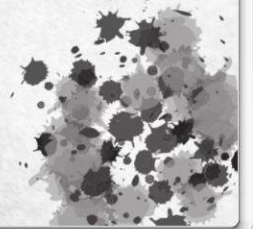
亡くなった人との最後の別れに2度目は来ないのだ。」と叱ったそうだ。どれだけ大切な仕事が入っているようが、

人への礼儀よりも優先されるものは無いと考え、地位を得て人の上に立つなら尚更、人として当たり前前の方が当たり前できるようにならなければいけないと説いたのである。



田中角栄

～戦後日本最強のリーダー～



時代背景

幼少期に戦争の時代を生き抜き、戦後日本が大きく動き出す1950年頃、今回の偉人「田中角栄」は政治の世界に飛び込んだ。1947年に初当選したのち、彼は持ち前の「頭脳」と「行動力」、時には「資金」をフル活用し、自党内での地位を高めていった。最終的に総理にまで上り詰め、たった2年間の政権であったが、その強烈なリーダーシップで多くの実績を残した総理である。そんな彼から、今回はリーダーに必要な素質を学んでいく。

偉人の生涯



田中 角栄 1918～1993 日本 政治家・実業家(建築士)

主 著 『**列島改造論**』 当時の日本で大流行した

異 名 「コンピューター付きブルドーザー」…頭脳+豪快な行動力

「今太閤」…現代版の太閤(太閤とは誰のこと…?→^[2] **秀吉**)

「目白の闇将軍」…国会に登院できない時期も、目白にあった自宅から、政治に影響を及ぼした

西 暦	年 齢	生 涯
1918	0	新潟の農家の家に生まれる。7人兄弟の次男で長男は若くして死去。極貧生活であった。
1932	14	高等小学校(現代でいう中学校)卒業→就職するも合わず、1か月で退職
1939	21	^[3] 建築]事務所を設立 自らが上に立ち、商売することを目標に努力してきた
1940	22	日中戦争発生 戦争に参加するも肺炎を患い帰国
1943	25	田中 ^[3] 建築]事務所設立 売り上げを急増させる
1947	29	戦後、政治家の道を志し、この年に初当選
1954	36	自民党副幹事長まで成り上がる 当時首相であった吉田茂の側近へ 以降、岸内閣・池田内閣・佐藤内閣で大臣を歴任(岸内閣時には戦後初の30代大臣に)
1972	54	内閣総理大臣に就任 当時史上最年少の首相となり、支持率は ^[] 80]%を誇った ^[4] 日中]国交正常化を実現
1974	56	オイルショックによる不況、角栄批判の記事などの影響で、退陣に追い込まれる
1976	58	^[5] ロッキード]事件発生 元首相としては異例の逮捕 以後、死ぬまで裁判が続く
1993	75	死去 1990年まで政治家として活躍

★角栄の豪快エピソード① 「生きたカネは、やがて“芽”を出す。敵ですら、味方になる。」

彼の成り上がり人生を語る上で欠かせないのが、「お金」の使い方。貧しい幼少期を経験し、金によって人が離れていった父親の姿や、社長になった途端手のひらを返すように態度が変わった同業者などをみて、金が人を動かすという考えが身に染みついていた。政治家になってからも徹底して金を活用し、人の心を掴んでいった。

田中派の一回生議員が女性問題で困り、解決のためにどうしても100万円（現在の価値では3倍以上）足りなかった。やむなく角栄に100万円の借金を申し込んだところ、すぐに袋が手渡され、中身には300万円と直筆の一枚のメモが入っていたという。

トラブルは以下のように必ず解決しなさい。まず100万円で問題にケリをつけろ。次の100万円でお前の不始末で苦勞したまわりの人たちに、飯を奢るなど、必ずお礼をすること。次の100万円は万一の場合のために持っておくように。以上、これらの金の返済は無用である。

また、敵となる反田中派の議員が入院した際にも、角栄は真っ先にお見舞いに訪れ、派閥のボスよりも多額の見舞金を置いていったという。毎日数百万の見舞金を置いたという話も残っている。この議員は以後も他の派閥に所属していたものの、ピンチの時は派閥を超えて田中を支えたという。

このように、角栄は資金を効果的に使い、時には敵さえも味方につけた。金を出すだけでなく、どのように渡せば相手の心に響くだろうか、相手のプライドを傷つけずに済むだろうかなどという気配りにも長けていたからこそ、多くの仲間が彼のもとに集まったのだろう。節約、貯金が当たり前の現代であるが、「お金は使うべき時には使う！」という心意気が必要かもしれない。

★角栄の豪快エピソード② “中卒”の“田舎者”が大臣として成功した理由

大臣とは、各省庁のリーダー。つまり、今でいう東大や京大といった名門校を卒業したエリートたち(官僚)が部下となる。官僚は元々政治家との関係も良好ではなく、中卒で田舎者の角栄に対して敵対心をもってかかる者も多かったという。そんな相手に対して、一発で心を掴んだ大臣就任時の演説が、伝説となっている。

「私が田中角栄であります。皆さんもご存じの通り、高等小学校卒業であります。皆さんは全国から集まった天下の秀才で、金融、財政の専門家ばかりだ。かく申す小生は素人ではありますが、トゲの多い門松をたくさんくぐってきており、いささか仕事のコツは知っているつもりであります。これから一緒に国家のために仕事をしていくこととなりますが、お互いが信頼し合うことが大切だと思います。従って、今日ただ今から、大臣室の扉はいつでも開けておく。我と思わん者は、今年入省した若手諸君も遠慮なく大臣室に来てください。そして、何でも言ってほしい。上司の許可を取る必要はありません。できることはやる。できないことはやらない。しかし、すべての責任はこの田中角栄が背負う。以上！」

これを聞いた大蔵官僚たちは、一発で参ってしまった。君たちは自由にやれ、責任は私取る、と言われて心醉しない部下はいないだろう。現在の政治家という、「記憶にございませぬ」「私は関係しておりませぬ」

「検討したいと思います」などと、保身に走り無難な発言をするイメージがついてしまっている。現在の政治家に、彼のように豪快に言い切れる人はどれだけいるのだろうか…？と、つい考えてしまう。





偉人の功績・思想



★日中国交正常化

当時日本にとっての中国とは「中華民国」（今でいう台湾）であった。「中華人民共和国」は米国と敵対する国であり、米国の顔色をうかがう日本も同様に、国として認めていなかった。そんな中首相に就任した角栄は、東アジア外交を主導していきたくらいで中国との国交正常化を進めた。米国より一足先に動くことは当時異例であったが、ニクソン大統領への根回しも丁寧な済ませ、9月に国交正常化（^[6] **日中共同声明**）を成立させた。これが就任から2か月の出来事である。

この時に、国交正常化の証として、上野動物園に2頭のジャイアントパンダが贈られている。

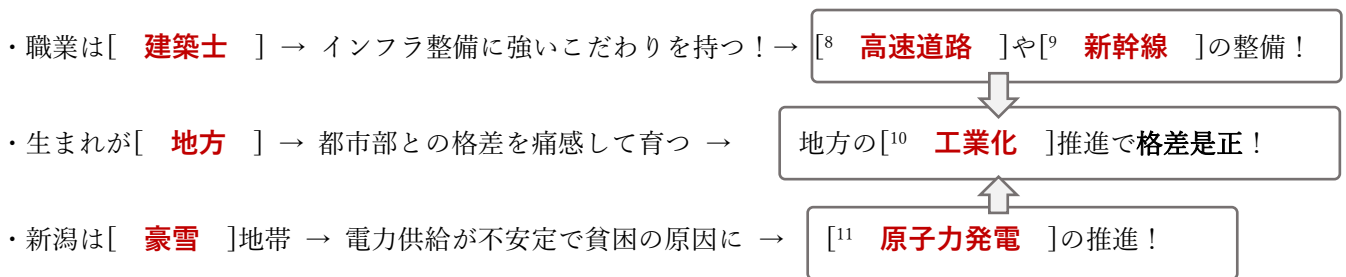


★目白の闇將軍

退陣に追い込まれた角栄をさらに窮地へ追い込んだのが^[7] **ロッキード事件** である。米国の航空会社が航空機をANAへ購入するよう説得するために、角栄が賄賂を受け取っていたとして逮捕されたのである。これは証拠が曖昧であったり、関係者が相次いで不可解な死を遂げたりするなど、疑惑が多く、角栄自身も容疑を否認していた。しかし、裁判にかけられた期間が長かったため議員活動ができなくなってしまったのである。そこで、目白にあった自宅から出られない角栄は、弟子たちを権力者に送り込むことにした。大平・鈴木・中曽根と3代に渡り田中派の議員を首相へ押し上げたように、陰で政界に影響を与え続けたため、**目白の闇將軍**と呼ばれるようになった。ちなみに、ロッキード事件の裁判は最高裁まで続いたが、角栄の死によって未解決のまま終了となった。戦後最大のミステリーと言われている。

★角栄が作った日本の基礎

たった2年という首相在職期間でここまでの印象を与えているのは、遺した実績が大きいからである。もう一度彼の生涯を見ていくと、彼の人生が政治家として成し遂げた実績に繋がっていることがわかる。



その他にも、郵政大臣の在職中にテレビ局の承認を一気に推進し、**日本のテレビ業界の基礎**を作ったことや、**情報回線の全国的な整備**の必要性を説き、後のインターネット社会の基礎を作ったことなど、現代日本を支えるものをいち早く察知し、行動に移していたことがわかる。カネの問題や逮捕の面でマイナスの印象を与えるものはあるが、ここまで行動力に長けた首相は珍しく、強い人気を誇った。逮捕後、裁判で政治活動が制限されていても、67歳で脳梗塞になり国会へ行けなくなっても、議員として当選し続けたことが、圧倒的な支持を物語っている。



偉人から学ぶこと

Work リーダーに必要な資質とは何だろうか？

最後に戦後最強のリーダーから、人の上に立つための資質について学んでいく。まずは自分の中でリーダーに必要な資質を考えてみましょう。

自分の考え

他者の考え

角栄流 リーダーに必要な力

① 1人1人と向き合う力

大臣として入省してきた新人を迎え入れる際のエピソード。多くの人前でメモを一切見ずに数十人の名前を呼びながら握手をして声を掛けた。

名前を間違えることが決して許されない状況で、それを淡々とやってのけた後、秀才ぞろいの若者に対し一言。「確かにお前たちは頭はいいだろうが、人間としての力は私の方が一枚も二枚も上手である！

上司と上手いかないこともあるだろう。そんな時は迷わず大臣室に駆け込んで来い！」

② 決断する力

中卒の政治家がエリート揃いの官僚に受け入れられたのはこれまでの説明の通り。そして口だけでなく仕事もできたからこそ、彼は信頼されたのである。難しい決断にも的確に指示を出し、ここぞという時は潔く頭を下げた。無難な逃げ方は一切しなかった。

③ 努力する力

政治家として宴会が多かったが、彼は毎晩3つまでで、各1時間ずつと決めていた。ゆえに、18時から始まる宴会も21時には必ず切り上げ、22時には就寝するようにしていた。その後、深夜の2時に起きて徹底的に勉強に励むのが日課であった。(＋α)新潟から上京した際にも、朝5時から夕方5時まで力仕事をした後、学校で授業を受けた。寝落ちして体がふらつけば、手のひらに鉛筆の芯が刺さって目覚めるように工夫していたそうだが、ある日あまりに疲れて大きく傾いてしまった際に親指の深くまで鉛筆の芯が刺さってしまったという。この芯は角栄が死ぬまで指に残り続けていたそう。

④ 人への礼儀

母は謙虚な人で、常に「いい気になるな、でかいこと言うな」と言い続けた。角栄自身も人に対して謙虚であり、気配りを徹底した人物であった。

ある日、予定を管理する秘書が、角栄の関係者の葬儀よりも、重要な会議を優先させたことがあった。これに対して角栄は、「これが結婚式なら判断は正しい。改めて祝いに行けばよい。だが葬式は別だ。亡くなった人との最後の別れに2度目は来ないのだ。」と叱ったそう。どれだけ大切な仕事が入っているようが、人への礼儀よりも優先されるものは無いと考え、地位を得て人の上に立つなら尚更、人として当たり前前の方が当たり前前のできるようにならなければいけないと説いたのである。